

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 10 日現在

機関番号：32640

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23720430

研究課題名(和文) アメリカ合衆国の社会・文化的「周縁」における暴力や痛みに関する文化人類学的研究

研究課題名(英文) A Cultural Anthropological Study on Violence and Pain at Socio-Cultural "Margins" in the US

研究代表者

中村 寛 (NAKAMURA, Yutaka)

多摩美術大学・美術学部・准教授

研究者番号：50512737

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：代表者はフロリダ州、ルイジアナ州、オクラホマ州、ニューメキシコ州、ハワイ州ハワイ島、モロカイ島、マウイ島、オアフ島、ニューヨーク州ニューヨーク市を訪れ、フィールドワークを行なった。いずれも、これまで長きにわたり調査してきたアフリカ系アメリカ人コミュニティとの比較で、先住民コミュニティの語りや文化表現に焦点を当てつつ、同時に新たに住み着いた者による文化運動にも注目したフィールドワークだった。また、比較のために英国デヴォン州トトネス、ダーティントン、プリマスも訪れ、フィールドワークを行なった。研究を通じて、社会・文化的「周縁」における暴力と文化表現の動的な関係の一端を明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：Over the last four years, I have visited Florida, Louisiana, Oklahoma, New Mexico, Hawaii (Big Island, Molokai, Maui and Oahu) and New York City to conduct my fieldwork. In relation with the African-American communities in which I have conducted my fieldwork for many years, this research project focused on the narratives and cultural expressions among the selective Native American communities. In Hawaii, I have also looked at selective cultural movements among the new comers, who have just recently settled around the area. Furthermore, I visited Totnes, Dartington and Plymouth in Devon, UK to conduct a fieldwork for comparison sake. Throughout this research, I clarified the dynamic relationship between violence and cultural expressions in the socio-cultural "margins."

研究分野：人文学、文化人類学

キーワード：マイノリティー エスノグラフィー 暴力と社会的痛苦 社会・文化的「周縁」における文化表現や文化運動 アメリカ社会

## 1. 研究開始当初の背景

研究開始当初、「周縁」あるいは「辺境」というコンセプトに改めて着目する研究としては、たとえば Brian Keith Axel ed., *From the Margins: Historical Anthropology and Its Futures* (Duke University Press, 2002) や Veena Das and Deborah Poole eds., *Anthropology in the Margins of the State* (School of American Research Press, 2004)、鎌田遵『「辺境」の抵抗 核廃棄物とアメリカ先住民の社会運動』(御茶の水書房、2006) などがあった。いずれの著作も、研究対象や方法論において異なるが、地理的「周縁」ということだけでなく、社会・文化的な意味での「周縁」を再定義しつつ、そこでどのような実践が生み出され、それを通じていかなる規律や規範がつくり直され、境界が再設定されるのかを明らかにしている。本研究もまた、こうした試みに連なるものである。

研究代表者が「周縁」に着目した理由は、地理的・社会的・文化的「周縁」において、暴力が極めて明示的なかたちで顕在化し、社会的痛苦 (social pain and suffering) が経験されるのと同時に、そうした暴力や痛苦の理解・受容・解決の取り組みがなされると考えるからである。「周縁」に着目することで、諸々の文化規範を支える構造が顕在化する瞬間を捉えると同時に、そうした構造が変質していく瞬間をも捉えたいと考えている。

研究代表者はこれまでアメリカ国内のムスリム、特にアフリカ系アメリカ人ムスリムについて研究を進めてきた。アメリカ国内のムスリムの数は現在 600 万人以上と言われ、アメリカで最も信者を増やしている宗教と言われている。なかでもアフリカ系アメリカ人は、そのうちの約3分の1を占めるとされ、その数の多さだけでなく、大部分が改宗者であるという事実や、歴史的背景や社会的コンテクストの特殊性、そしてアラブ・ムスリムたちを含めたムスリム移民たちとの差異や共通性といった観点から、アメリカ国内のイスラームを研究対象とする際には無視できない存在となっている。例えば、山内昌之による『イスラームとアメリカ』(岩波書店、1995)、ジェーン・スミスによる *Islam in America*, Columbia University Press, 1999、大類久恵による『アメリカの中のイスラーム』(寺子屋新書、2006) は、いずれも1章以上を割いて、アフリカ系アメリカ人によるイスラームの実践に言及している。また、アフリカ系アメリカ人ムスリムのみならず、社会学者エリック・リンカーンによる *Black Muslims in America*, W.B.Eerdsman, 1994[1961]と、社会学者マティアス・ガーデルによる *In the Name of Elijah: Louis Farrakhan and the Nation of Islam*, Duke University Press, 1996 の二つがある。だが、両著作ともに、アフリカ系アメリカ人ムスリ

ムによる組織のなかでも特に著名なネイション・オブ・イスラーム(以下、NOI)のみに研究対象を限定しており、NOIのメンバーではない多くのアフリカ系アメリカ人ムスリムの姿はそこには見出せない。さらに、上述の五つのいずれの著作も、アメリカにおけるイスラームの一般的な位置づけ、イスラームの米国内におけるネットワーク、諸々のイスラーム組織の理念や信念とそれらの歴史的・社会的コンテクストを捉え分析する点で優れているが、ムスリムと非ムスリムとの関係 交流や協力、対立等 は取り上げられていない。またそうした関係の構築・維持のなかで、イスラームの実践そのものが変化していくと同時に、非ムスリムによる文化実践もが変化していく点に関しては、最小限の言及にとどめられており、今後の研究に委ねられている。

このような認識のもとに、本研究は遂行されるに至った。

## 2. 研究の目的

本研究は、アメリカ国内の社会・文化的「周縁 (margin)」における複数のコミュニティの関係に焦点を当て、個々の成員たちの語りや対話、価値や制度の再構築のプロセスを明らかにするという全体構想のもとに行われる文化人類学的研究であり、アメリカ国内の複数の宗教、民族、コミュニティの関係や相互の取り組み、文化的実践を描写し、分析することで、ひとつの宗教、民族、コミュニティを超えた関係の構築や、暴力や痛み「和解」に向けた取り組みの文化的諸相を明らかにすることを目的とする。

この目的を達成することで、日本社会の多文化共生に向けた取り組みや、暴力・痛みに関する対話の場のあり方を構築する際の重要な参照軸を提示することができる。

そこで本研究では、社会・文化的「周縁」のひとつの事例として、ムスリムと非ムスリムとの交流や結節点に着目する。とりわけ「アメリカ同時多発テロ事件(9・11)」以降、イスラームについて多くの「断定的」言説が形成され、流通するなかで、アメリカ国内に暮らすムスリムと非ムスリムとの関係に関する民族誌的研究は、焦眉の課題だと考える。アメリカ社会全体から見れば、イスラーム自体がすでに社会・文化的「周縁」として存在しているが、ムスリムと非ムスリムの共同作業はイスラームという集合的現象の「周縁」でもある。

研究期間である四年間で、主にニューヨークのモスクやイスラーム・センターと非イスラーム組織とが、どのような交流や共同の取り組みを行っているかを明らかにしていく。

そのうえで彼らが共同の活動を通じて、どのような問題に向き合い、どのような語りを紡ぎ、なにを成し遂げるのかを明らかにする。比較の見えやすい各モスクのイマームや活動組織のリーダーたちだけではなく、活動の参加者の語りに注目し、彼らがどのような仕方ですら現在の現在や過去、イスラームやアメリカの現状を語り、どのような日常を生活しているのかを明らかにする。モスクに関しては、ニューヨーク市内にあるマスジッド・マルコム・シャバズやモスク・オブ・イスラミック・プラザーフード、イスラミック・センターの取り組みに着目する。また非イスラーム組織としては、キリスト教会や仏教等の宗教コミュニティ以外にも、The Interfaith Center of New York等の非宗教的組織の取り組みに着目する。また、可能な限りアメリカ社会の他地域の社会・文化的「周縁」をフィールドワークすることで、そうした「周縁」における暴力や痛みへの対峙のあり方を比較していく。

### 3. 研究の方法

研究代表者はこれまでの研究でニューヨークのアフリカ系アメリカ人ムスリム・コミュニティに独自のネットワークを築いてきた。そうしたネットワークに依拠しつつ本研究を進めていった。一年目は、ムスリム・コミュニティと活動をともにするニューヨーク市内にある、多数の非イスラーム組織を訪問し、共同の取り組みや相互理解等に関する資料収集および参与観察を行う予定だったが、それに加えてアメリカ先住民のコミュニティを訪問し、フィールドワークを行なった。二年目以降は、一年目の研究成果に基づき、さらにニューヨークでの調査を深めると同時に、すでに調査経験のあるシカゴ、デトロイト、ホノルルを中心に、可能な限り多くの地域を訪れ、収集した情報の比較を行う。研究成果については文化人類学会等の学会や研究会等で報告、学術論文等のかたちで公開するだけでなく、ホームページ上で部分的に紹介していく。研究の推進にあたっては、テリー・ウィリアムズ(ニュー・スクール・フォー・ソーシャル・リサーチ)やウィリアム・コーンブルム(ニューヨーク大学)に研究協力を要請する。

(1)本研究を遂行する上での具体的な工夫としては以下のようなものがあつた。

既にニューヨークのすでに長期間にわたる信頼関係のあるムスリムたちに協力を要請し、彼らがすでに行っている非ムスリムとの活動に参加する。また彼らのアドバイスに従って適宜他の組織を訪問する。新しい組織を訪問する際には、彼らがすでに築いているネットワークのなかで、彼らの文脈に沿うかたちで訪問を行う。現地調査においては、な

によりもフィールドにおいて出会う人間のリズムに従うことが重要となるため、現地滞在中のスケジュールについては相手からの助言に従って柔軟に変更する。

比較分析のためのニューヨーク以外の対象地域の選定については、すでに調査経験のあるシカゴ、ホノルル、デトロイトを当面のフィールドとしつつ、研究協力者でありニューヨークやその他のアメリカ地域社会の事情に詳しいテリー・ウィリアムズやウィリアム・コーンブルムと相談したうえで決定する。とりわけテリー・ウィリアムズとはここ数年緊密に連絡を取り合っており、これまでの研究においてもニューヨークの都市空間の変容やアメリカの諸地域の歴史的・社会的文脈などについて、多くの情報や示唆を得ているため、本研究の遂行にあたっても有益な情報を得られる。限られた時間と資金のなかで、新しい調査地での研究成果をあげるためには、事前の準備が重要となるため、日本からは彼らと電子メール等を通じて連絡を取る。

年度ごとのフィールドワークや研究成果については学会報告だけでなく、国内のアメリカ研究者や文化人類学者、社会学者等、複数の研究者と研究会や打ち合わせを通じて意見交換を行い、適宜成果のとりまとめや次年度の研究計画に反映させていく。研究自体を開かれたものにしていくためにも、このことは不可欠である。

これまでも活動をともにし、またアメリカ社会の現状に詳しい複数の芸術家(アーティスト)に協力を得る。彼らは必ずしも研究者ではないが、現地の情勢を批判的に考察することのできる彼らの協力は、短期間の間に成果をあげるためにも重要となる。特にムスリム・コミュニティの事情に詳しい映像作家のサリーム・アジズ、自らも非宗教的社会運動にコミットしている映像作家のシェリー・ウェルドン、現地テレビ制作会社に勤めた経験があり自らも映像づくりを手がけている松尾真に協力を要請し、映像での記録を残す。

(2)研究計画を遂行するための研究体制について、研究代表者及び必要に応じて研究協力者の具体的役割

研究代表者である中村寛は、研究全体の推進、フィールドワーク、参与観察、資料収集、聞き取り調査をすべて行う。

研究協力者であるテリー・ウィリアムズとウィリアム・コーンブルムは、アメリカ社会およびニューヨークの都市空間での「周縁」に関する最新の研究動向、アフリカ系アメリカ人コミュニティの現状に関して助言・協力をを行う。

研究協力者であるサリーム・アジズ、シェリー・ウェルドン、松尾眞は、現地調査の際の助言・協力を行い、映像記録作成のサポートを行う。

#### 4. 研究成果

一年目は、中心的なフィールドであるニューヨークで調査を進めると同時に、より広い視野での比較を行うため、可能な限りアメリカ社会の全景把握を試みた。そのため、「周縁」というテーマを念頭に、ニューヨーク以外の地域にできるだけ足を伸ばし、先住民コミュニティやムスリム・コミュニティなどでフィールドワークを行なうことにした。こうした探求は、宮本常一や鶴見良行の仕事を念頭に置いてのことで、フィールドワークを通じて諸問題を捉え直す試みだった。その際、先住民コミュニティにおいて注目したのは、黒人と先住民との関係であり、とりわけ「ブラック・セミノール」や「マルーン」が先住民によってどのように語られるのかに着目することができた。その意味では一年目の研究は、示唆的であり意義深いものだったと言える。

二年目は、一年目の成果を踏まえ、本研究の中心的なフィールドであるニューヨークでの調査に加えて、ニューメキシコ州に焦点を当て、先住民たちによる文化施設や博物館、ギャラリー、美術館などを足がかりに、文化表象のあり方、社会問題の捉えられ方を調査しようとした。調査の過程で、サンタフェ市近くのサント・ドミンゴ・プエブロの住民と知り合い、生活状況や置かれた歴史的な位置、などに関して、貴重な知見を得た。また二年目は、先住民たちのアート表現に多く触れ、それらの表現がどのような問題に向き合うなかでつくられたものか、その一端に触れることができた。その意味では二年目の研究は、示唆的であり意義深いものだったと言える。

三年目は、一、二年目の成果を踏まえ、本研究の中心的なフィールドであるニューヨークでの調査に加えて、ハワイ州モロカイ島、ハワイ島に焦点を当て、島の歴史・文化に関連する博物館や施設を訪れると同時に、ネイティヴ・ハワイアンたち生活圏を訪ね歩いた。また、とりわけハワイ島では、島に移り住んで、自分たちで持続可能な生活のあり方を模索する人びとや乱開発に反対する人びとに出会い、話を聞くことができた。ハワイ島は全体的に、環境や自然保護に対する意識が高く、電気・水道・ガスなどのない「オフ・グリッド」と呼ばれるエリアで暮らす者が複数いる。また、森のなかに暮らし、乱開発と闘う者たちにも出会った。モロカイ島で出会ったネイティヴ・ハワイアンも、森の中にタロイモ畑を再生して暮らしている。こうした生き方を、ひとつの文化運動として捉えた場合、

とりわけ「3.11」以降の日本社会のあり方を考える際の重要な参照軸になり得ることがわかってきた。こうしたことは、当初の計画にあったわけではないが、フィールドワークを重ねるうちに明らかになったことであり、「周縁」というテーマに関連する。三年目は、ハワイ先住民たちがどのように文化を語り実践するのかに迫ることができたのと同時に、ハワイの文化や環境を背景に、これからの持続可能な生のあり方を模索する実践者たちに触れることができた。その意味で三年目の研究は、示唆に富み、意義深いものだった。

一～三年目のフロリダ州、ルイジアナ州、オクラホマ州、ニューメキシコ州、ハワイ州、ハワイ島、モロカイ島での調査を踏まえ、最終年度はハワイ島、マウイ島を訪れた。いずれも、先住民コミュニティに焦点を当てつつ、新たに住み着いた者による文化運動にも注目したフィールドワークだった。また、最終年度は研究代表者が海外研修でアメリカ国内に長期滞在していたため、ニューヨーク市でもハーレムを中心にいわゆる社会的マイノリティが集住する地区で調査を行なうと同時に、本研究に不可欠な理論的探究を深めるべく文献・資料収集を行ない、共同研究者であるテリー・ウィリアムズ氏らや社会問題に強い関心を示すアーティストや音楽家たちと対話の機会を持った。なかでも難民問題に強い関心を示し、それをテーマに舞台パフォーマンスを発展させようとするアーティスト、クリスティーナ・コロヴィック氏やサラ・ガラシーニ氏らとの対話は、今後の共同研究にも深くかかわる種類のものだった。こうしたアーティストや音楽家たちとの対話は、研究協力者である松尾眞氏の助力を得て進めた。さらに海外研修中は、トランジション・タウンとして注目を集めるイギリス・デヴォン州トトネスに滞在し、町ぐるみの文化運動のあり方をフィールドワークすると同時に、シューマツハ・カレッジやプリマス大学を訪れ、文化のづくり手やアーティスト、研究者との対話の機会を得た。この滞在は、「周縁」における取り組みをひとつの社会を超えて比較し、見つめなおすうえで効果的だった。とりわけプリマス大学トランステクノロジー・リサーチのマイケル・プラント氏およびマーサ・プラスニッグ氏との対話は、本研究に理論的深みをもたらすだけでなく、今後の対話的共同プロジェクトにもつながる有益なものだった。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

中村寛、「文化運動としてのハーレム・ライターズ・クルー 人類学とアートの結節の探求のために」『多摩美術大学研究紀要』第27号、査読有、2013、pp.141-155.

中村寛、「アーカイブへの不満 アフリカ系アメリカ人におけるアイデンティティをめぐる闘争」『文化人類学』78(2)、査読有、2013、225-244.

中村寛、「『他者』の差異化におけるダイナミズム ニューヨーク・ハーレムのムスリムたちの民族誌的素描から」『中央大学社会学研究所年報』第17号、査読無、2013、pp.52-78.

中村寛、「ディスコミュニケーションのコミュニティ ニューヨーク・ハーレムにおけるアフリカ系アメリカ人イスラーム組織の成立と解体」『紀要社会学・社会情報学』第24号、査読無、2014、中央大学文学部.

[学会発表](計0件)

[図書](計3件)

中村寛、「まえがき この小冊子について」(pp.4-15)、「ケワへの旅 アメリカの周縁をあるく」(写真・松尾眞、pp.88-111)中村寛他編著『Lost and Found 同時代とアートを切り結ぶ。』2013、人間学工房.

中村寛、「もうひとつのエリジウム、あるいは異者を造りあげる感性と技術について コロンビア大学のキャンパス拡大とハーレムの境界の引きなおし」新原道信編著『“境界領域”のフィールドワーク “惑星社会の諸問題”に応答するために』中央大学出版部、2014、pp.229-283.

中村寛、「はじめに この小冊子について」(4-14)、「モロカイ島/ハワイ島への旅 アメリカの周縁をあるく(二)」(写真・松尾眞、pp.94-138)中村寛他編著『Lost and Found vol.2 個+個=同時代』2014、人間学工房.

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

<http://www.ningengakukobo.com/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

中村 寛 (NAKAMURA, Yutaka)  
多摩美術大学・美術学部・准教授  
研究者番号：50512731

(2)研究分担者

( )

研究者番号：

(3)連携研究者

( )

研究者番号：

(4)研究協力者

テリー・ウィリアムズ (WILLIAMS, Terry)

ウィリアム・コーンブルム  
(KORMBLUM, William)

サリーム・アジズ (AZIZ, Saleem)

シェリー・ウェルドン (WELDON, Sherry)

松尾 眞 (MAKOTO, Matsuo)